

中学校体育における協同的な学びに関する実践的研究

学習開発分野 (16220902) 尾 崎 克 成

本研究では岡野・佐藤 (2015) が提唱する「体育における対話的学び」を基にデザインした授業実践を対象として、バレーボールの授業実践において、どのような学びのありようが生成されてきたのかという、体育における学び合いについて考察することを目的とした。その結果、自己 (身体) との対話として、ボールをつなぐための技法を身につけることが学びのありようとして明らかになり、体育学習において協同的な学びの有効性が示唆された。

[キーワード] 協同的な学び, 学び合い, 共有の学び, ジャンプの学び, 自己 (身体) との対話

1 問題の所在と方法

(1) 問題の所在及び研究の背景

近年、「協同的な学び」という言葉をよく耳にするようになった。この協同的な学びについて、岡野・佐藤 (2015) は、聴き合う関係を基礎とし、「体育科において尊重されるべきは『話し合い』の言語ではなく、体育の身体言語の『訊き合い』であり、その『学び合い』である。」と述べている。学び合いにおいて重視すべきは教え合いではなく、一人では学びが成立しないという前提に立ち、聴き合う学びを追求していくことである。また、協同的な学びのメリットについて、佐藤 (2012) は、学力の低い子どもには学力を回復する機能を発揮すること、学力の高い子どもにはより高い学力を保障することができるとしており、すべての子どもに有効である。

しかし、本研究で取り上げる、体育のバレーボールにおいて、ドリル練習を繰り返し、効率よくパスをつないで三段攻撃を成立させようとするなどの個人の技能で成立させようとする授業は今も見られる。さらに、深見ら (2010) は、バレーボールの授業において、生徒の興味・関心に委ねた単なる勝敗の競い合いが見られる授業は少なくないとしている。協同的な学びの視点から捉えた、バレーボールの本質を捉えていない授業が多く行われているのが現状である。

(2) 研究の目的

本研究では、岡野・佐藤 (2015) の「体育における対話的学び」の視点からデザインした中学校でのバレーボールの授業実践を対象とし、バレー

ボールの授業における生徒の協同的な学びについて体育学習での有効性を明らかにしていくことを目的とする。

2 先行研究の検討

(1) 体育における対話的学びの授業デザイン

岡野・佐藤 (2015) は、体育における対話的学びの授業デザインの手順を以下の 3 つに分けている。

- ①「運動の中心のおもしろさ (文化的な価値)」を設定する。
- ②「わざ (身体技法)」の内容を設定する。
- ③「学びの展開」では、原則的に 2 つの課題を設定する。

①は「取り上げようとする運動とは『何か (概念)』に相当し、その運動の真正なおもしろさを導き出し、単元の主題 (テーマ) を設定することである。」と述べている。②は「取り上げようとする運動の『何を (目的)』に相当し、その『運動の中心のおもしろさ (文化的な価値)』にふれる『運動の最小単位 (身体を経験)』を明確にすることである。」としている。③の課題について「第 1 の課題は『共有の学び』として位置づけることである。これは基礎的事項を共有する学びであり、『運動の中心のおもしろさ (文化的な価値)』を仲間と共有する営みである。そして、第 2 の課題は『ジャンプの学び』として位置づけることである。これは少し難しい課題に挑戦することを通して、『運動の中心のおもしろさ (文化的な価値)』を仲間と共に深く探求する学びである。」と述べている。

この3つの手順は、これまでの動きを伝えるなどの指導や教授を目的としたものとは異なるものであることが分かる。

岡野・佐藤（2015）は、体育における対話的学びの1つの大切な考え方として、「学習者を変えるのではなく、学習者と相互作用する環境を変更することによって、学習者の可能性を引き出すことである。」と述べている。

3 実践と結果（明らかになったこと）

(1) 実践授業の概略

教職専門実習Ⅱにおいて、山形市内A中学校でバレーボールの授業実践を行った。

対象生徒は第2学年の生徒28名（女子28名）で、8時間扱いの3～7時間目を担当した。

(2) 授業デザイン

岡野・佐藤（2015）の体育における対話的な学びを基に授業のデザインを行った。

バレーボールにおける中心的なおもしろさ（文化的な価値）は「ボールを自陣に落とさずに返し、ラリーを続ける」ことと設定する。文部科学省（2008）には「ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること」としており、スパイクやサーブなど点を取ることも魅力の1つであるが自陣にボールの落下地点を守り、ラリーを続ける競技と捉えることができる。

わざ（身体技法）の内容の設定だが、バレーボールにおける運動の最小単位は「落下地点に移動し、アンダーハンドパス又はオーバーハンドパスによってボールをつなぐ」こととする。そこで本単元では、バレーボールの様々な技能の中でもパスに着目して狙ったところにパスをつなぐことができるような内容づくりを目指す。

最後に学びの展開についてである。ボールの落下地点をみんなで守ることをテーマとし、チームでいかに落下地点を防ぎ、守りつなぎ合って相手に返球できるかというところに着目し、次の2つの課題を設定する。

課題①：グループ内でボールを落とさずにパスを続けられるか（共有の学び）

課題②：ネット越しに相手から飛んでくるボールを落とさずに、つなぎ合って返球できるか（ジャンプの学び）

表1 授業デザイン

主題	運動の中心的な面白さ	ボールを自陣に落とさずに返球し、ラリーを続ける
内容	わざ（身体技法）の形成	狙ったところにパスをする
課題	共有の学び	・グループ内でボールを落とさずにパスを続けられるか
	ジャンプの学び	・ネット越しに飛んでくるボールを落とさずに、つなぎ合って返球できるか

(3) 記録方法

実践授業のチーム練習（1人が相手コートから投げ入れてそれをつないで相手コートに3回で返す）、パスゲーム（アンダーパス又はオーバーパスのみで行う試合形式）において、ビデオカメラで活動の様子を撮影する。話し合い場面では、ICレコーダーを使用して発話の録音をする。授業で記入する学習カード及び自己評価カード、チーム練習でのパス成功回数も資料とする。

(4) 記述方法

記録からバレーボールの運動過程における学びを生徒間の具体的な活動の様子、その時の状況などを活動内容として、事実のみをエピソードとして物語のように記述する。なお、生徒の名前はすべてカタカナ仮名表記とし、鍵括弧（「」）は生徒や授業者の発言を表す。

(5) 解釈方法

対象授業において学びが生じた場面と学びが停滞した場面を中心に上げて検討する。

(6) エピソード分析

【エピソード1 「ボールをつなぐ」という課題が共有できていない】

第3時のことである。パスゲームを行っており、2, 3, 5班はパスをするときに少し高めに上げて時間を作り、パスをつなぎやすいように工夫している姿が見られた。

それらの班と違った動きをしている班があった。1班にいるモモは、ボールが飛んできてパスをするが低い弾道や短いパスでアヤノ、ミヤビ、ユウにつないでいた。それに対して「うわっ」と驚くようにしてアヤノが反応したり短すぎてユウが届かなかったりと、うまく対応できずにボールをつなげないということが何度もあった。しかし、モモは「おーい」と笑いながらパスをつなげなかったアヤノ、ミヤビ、ユウに対して言っていた。そういったモモのパスに対してその3人は何も指摘することではなく、一緒に笑っていた。

こういった姿から、モモの目的が自分のパスを完了することであり、それを次に仲間が取りやすいようにという考えがなかったことが伺える。つ

まり、自陣にボールを落とさずに返球していか
にラリーを続けるかという「ボールをつなぐこ
と」の課題が意識されていなかったと言える。さらに、
3人がモモのパスに対して何も指摘せずに一緒に
笑っている姿からも課題を共有できていないと考
えられる。

【エピソード2 声でボールをつなげようとする】

第5時のことである。バレー部に所属するリカがいる2
班は、チームで3回つなげて相手コートに返す練習を行っ
ていた。セッターであるリカが相手コートからボールを投
げ入れて始めるのだが、投げ入れるときに「アイちゃん」
と投げる相手に声をかけて行っていた。しかし、なんとか
2回まではつなげることができるが3回目でリオンとセイ
ナが譲り合ったりセイナ、リオン、アイ、ミズホの一步目
が遅れたり相手コートにうまく返せずいて2班の雰囲気
が暗くなってきていた。すると、その様子を感じ取った
リカが投げ入れるときだけではなく、自分がトスやパスを
するときも「ミズホ、リオン」と狙ったところにいる仲間
の名前を呼びながら行うようになった。

＜第7時に記入したリカ、リオン、ミズホ、ア
イの自己評価カードより＞

○授業を通して、パスを続けるためにはどのよう
なことが大切だと思いますか

リカ『声を出す、積極的に行く、フォローする。』
リオン『声がけ、励まし合い。』

ミズホ『声を掛け合って自分からパスをつなげに
行くこと。』

アイ『声を出すこと→取りに行かなかったりぶつ
かったりは少なくなった。』

バレー部に所属しているリカは、セッターを担
当しておりチームの中でも積極的に取り組んでい
た。そんなリカが投げ入れるときのみ名前を呼ん
でいたのだが、自分がパスやトスをするときも「○
○ちゃん」と声をかけるようになった姿が見られ
る。自己評価カードにも記入されているように、
リカはパスを続けるために大切なこととして声を出
すことを挙げている。また、ほかの班員もパスを
つなげる重要な要素として声がけを挙げており、
リカの意図を読み取っていたことが分かる。他の
班員に比べてバレーができるリカだが、自分がパ
スをした後にはどうすることもできないため、仲
間がボールをつなげるために譲り合いや一步目が
遅れることがないように、あのような声がけを思
いついたと考えられる。

【エピソード3 パスをつなぐための作戦】

第6時の3回で相手コートに返すチーム練習を行って
いることである。2班は、バレーボールが班の中で苦
手なアイとセイナのポジションを後ろにして、バレーボ
ールが得意なミズホとリオンを前にし、バレー部のリカがセ
ッターをして練習を行っていた。

途中に筆者が「これから5分計ります、相手コートに3
回パスをつないで何回返せたか数えておいてください、よ
ーいスタート」と言い、生徒は一斉に勢いよくスタートし
た。リカが相手コートからミズホに「ミズホ」と言いなが
ら投げ入れてミズホはオーバーパスでリカにパスをし、リ
カはそれをリオンに上げてオーバーパスで相手コートに返
すことができていた。次にアイにボールを投げ入れたが、
アイはアンダーパスをミスして左側の方へ飛んでいき、ミ
ズホが追ったがとることができなかった。その時にリカが
「こうするといいよ」と膝を曲げてアンダーパスの姿勢を
とって説明して、それを真似るようにアイやリオンも一緒
に行っていた。次にセイナに向けてリカが投げ入れた。セ
イナは少し高い姿勢のままアンダーパスで上げた。しかし、
ちょうど真ん中の誰もいない位置に飛んでしまった。それ
をセッターのリカが取りに行き、厳しい体勢になったがリ
オンに上げてオーバーパスでネットギリギリのところを飛
んでいきながら相手コートに返していた。セイナがサーブ
レシーブをしてつないで相手コートに返せたことをリカや
リオンが称賛していた。

＜第5時に班ごとに話し合う時間を与えたときの
2班のチーム話し合いシートより＞

『・前の2人(リオン、ミズホ)のミスを減らす
・後ろの2人(セイナ、アイ)はとりあえず安定し
たボール→無理して相手コートに返さない』

バレーが苦手なアイとセイナのポジションを後
ろにして得意なミズホとリオンを前にして行っ
ていることから、苦手な班員の技能を配慮した作戦
になっていることが見て取れる。また、チームの
話し合いシートにも役割を明確にすることが書い
てあることからそのようなことが言えるだろう。
また、この作戦は苦手な子を排除しようとしたも
のではなく、むしろアイとセイナがやりやすい環
境を作ろうとしたと考えられる。それは、アイが
ミスをしたときにリカが丁寧に指導している場面
やセイナが若干崩れてはいたもののサーブレシー
ブを上げることができ、それをつないで相手コ
ートに返せたときにリカとリオンが称賛している様
子から見て取れる。

(7) チーム別のパス成功回数

チーム練習において、5 分間のうち、相手コートに3回で返せた数の合計の推移を図1に示した。

【エピソード1】の1班と3班は回数を重ねるごとに成功回数が増加している。逆に6班は、回数を重ねるごとに成功回数が減少している。2班は、【エピソード2】の5時間目から【エピソード3】の6時間目にかけて急激に成功回数を伸ばしていることが分かる。4班が5時間目から6時間目にかけて急激に減少している原因として、3回で返せた数のみをカウントするというルールだったが、誤って認識して行っていたためにこのような結果となったと考えられる。

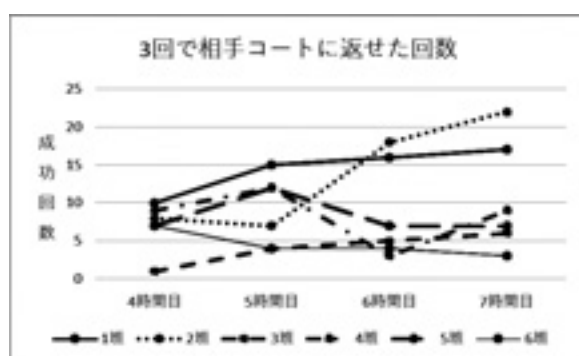


図1 チーム練習において5分間のうち相手コートに3回で返せた数の合計の推移

4 到達点と課題

本単元では、全体的な技術的指導に重点を置いていないにもかかわらず、それぞれがボールをつなぐためにどうすればよいのかを考え、つなぐための方法を生み出していった。

【エピソード3】の2班は、回数を重ねていくたびにボールをつなぐにはどうすればよいのかを考え、自分たちなりの作戦を形成していった。それは図1において、チーム練習での3回で相手コートに返せた回数が数を重ねるごとに上昇していることから分かる。また、【エピソード1】でリカから発せられた声は、ボールをつないで相手コートに返すためにという意志が込められた他者を意識した言葉として理解された。

一方で【エピソード2】のモモ、アヤノ、ミヤビ、ユウの姿においては、自分のパスが完了することが目的となっていた。これはボールをつなぐための意識がまだ浸透していなかったために課題が自分自身のものとなっておらず、学びの停滞を生む状態に陥ってしまったと言える。

以上のエピソードから、ボールをつなぐために自分なりの方法を模索していくという自己(身体)との対話が、試行錯誤している段階から行われていたと言えるだろう。その過程において、自分たちなりのボールをつなぐための身体技法を獲得していったと考えられる。

バレーボールにおいては、パスをしたら自分の役割が終わるという個人の技能に焦点化された授業ではなく、それぞれがボールをつないでいくおもしろさを仲間と共有する協同的な運動の営みとして捉えて、授業を行っていくことが大切になってくる。つまり、課題を仲間と探究する視点を共有する協同的な学び、特にジャンプの学びが体育学習において有効であると考えられる。

一方で、課題の共有や個別の生徒への教師側からの働きかけはどのようにしていくべきなのかを今後考えていかななくてはならない。

引用・参考文献

- 深見英一郎・須田香織・元塚敏彦・岡澤祥訓・久藤愛子 (2010) 「中学生女子バレーボールの授業研究～初めて学ぶバレーボールでどこまで上達できるのか～」, 『天理大学学報』, 第 224 巻, pp. 15-29.
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 保健体育編』, 東山書房.
- 文部科学省 (2015) 『「言語活動の検証改善の成果」について (平成 27 年度『言語活動の充実に関する実践研究』の取組を踏まえて)」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/20/1372311.pdf (最終閲覧日: 2016 年 12 月 3 日)
- 岡野昇・佐藤学 (2015) 『体育における「学びの共同体」の実践と探究』, 大修館書店.
- 佐藤学 (2012) 『学校を改革するー学びの共同体の構想と実践』, 岩波書店.
- 矢戸幹也・岡野昇 (2012) 「体育における協同的な学びに関する実践的研究-小学校 5 年生の短距離走・リレーを対象にして-」, 『三重大学教育学部研究紀要』, 第 63 巻, pp. 231-237.

A Practical Study on Collaborative Learning in Junior High School Physical Education
Katsunari OZAKI